

親子関係、教師生徒関係に関する心理学的研究の展望

— 親と教師の威厳ある態度研究の提案 —

遠 山 孝 司¹⁾

子どもの教育に関する多くの心理学的研究は、家庭環境や学校・学級環境が子どもに影響を与えることを示している。家庭環境や学校・学級環境の中で親または教師は「子どもを教育する存在」または「子どもに影響を与える存在」として大きな役割を果たす。そして、親や教師の子どもに対する態度や親子関係、教師生徒関係が子どもに、または子どもを対象とした教育の効果にどのように影響するかを扱った研究は多数存在する。本稿では、まず子どもが家庭環境や学校・学級環境から受ける影響を扱った研究を概観する。次に、親や教師が子どもに与える影響について扱った研究について概観し、その中で子どもが親や教師に類似する傾向を扱った研究、親や教師の期待や教育観、教育目標が子どもに与える影響を扱った研究、親子関係や教師生徒関係、親の養育態度、教師の指導態度が子どもに与える影響を扱った研究を紹介する。そして、これまでの研究で用いられてきた親子関係、教師生徒関係、親の養育態度、教師の指導態度をとらえる枠組みを概観する。最後に、親の養育態度、教師の指導態度についての今後の研究の方向性の1つとして、親の威厳ある養育態度と教師の威厳ある指導態度に関する研究を提案する。

第1節 家庭環境、学校・学級環境が子どもに与える影響

子どもは周囲の環境および周囲にいる人間から影響を受ける。心理学的研究の中にも、家庭環境、家族の雰囲気、家族からのソーシャル・サポート、学級環境、学校環境を取り上げた研究があり、それらの研究は家庭環境や学校・学級環境が子どもに影響を与えるという知見を示している。

(1) 家庭環境が子どもに与える影響

家庭環境が子どもにおよぼす影響として秋田 (1992)、

安藤 (1996) は家庭環境と子どもの読書行動の関連を検討した。秋田 (1992) は、小学生、中学生を対象に調査を行い、子どもの学年と親の読書への好意度が、親が子どもを図書館や本屋へ連れて行く頻度、読み聞かせの頻度などの読書に関連する行動に影響をおよぼし、それが子どもの読書への感情や読書行動に影響をおよぼすことを明らかにした。これに対して、安藤 (1996) は、秋田 (1992) で示された知見について、小学校6年生の双生児とその親を被験者とし、双生児法および親自身の行動認知と子どもによる親の行動認知の比較を取り入れた行動遺伝学的なアプローチにより追試を行った。その結果、親の認知する読書に関する家庭環境、特に家庭内の蔵書量が、子どもの読書行動に影響すること、一卵性双生児は二卵性双生児よりも親からの働きかけや親自身の読書に対する好意度の認知が類似する傾向があることが示された。宮下 (1991) は、大学生が回想した家庭の雰囲気とナルシズム (自己愛) 的傾向の関係をあつかい、男女ともに外向的で活発、大胆、派手な家庭の雰囲気が自己愛的傾向を強める可能性があること、女子においては冷ややかで厳格な家庭が自己愛的人格傾向を助長することを示している。西出・夏目 (1997) は、家族システムの機能状態の認知と子どもの抑うつ感の関連を検討し、子どもの抑うつ感に子どもが認知した家族システムの機能状態が影響していることを明らかにした。さらに、母親の認知した家族機能の促進要因がポジティブであることは、子どものポジティブな見方を介して抑うつ感を低減させるが、母親が独りよがりによりポジティブに捉えることはかえって子どもの抑うつ感の増加につながることを示した。また、佐藤 (2005) は家族のサポートが間接的に音楽大学の学生の進学後の適応感を高めることを明らかにした。

(2) 学校・学級環境が子どもに与える影響

学級環境が子どもに与える影響について、Ames (1992) や Maehr & Midgley (1991) は教室と学校における教育実践と教育方針が、生徒の成功の意味や達成

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生 (指導教官: 村上 隆教授)

目標のもとになっていることを示した。Roeser, Midgley, & Urdan (1996) は子どもが認知した学校の教育目標が子どもの目標として内面化されていることを示した。Brophy & Good (1974 浜名・蘭・天根訳 1985) は、不安の高い生徒にはあたたかさや構造化の2つの属性を備えた学級が必要であると主張した。

第2節 親と教師が子どもに与える影響

藤原 (1976) は、小学生から高校生までのさまざまな年齢の子どもが、仲間・教師・母親に同調する傾向があることを示している。このように子どもは自らを取り巻く環境に存在する他者に影響を受けるが、その中でも親と教師は子どもに教育的な配慮をしながら、大きな影響を与える存在である。ここでは、子どもが親と教師に類似する傾向、親や教師の期待や教育観が子どもにもたらす影響、子どもの親や教師との関係、親や教師の子どもに対する態度が子どもに与える影響についての研究をそれぞれ概観する。

(1) 親と子、教師と生徒が類似する傾向

親と子どもの性格特性や価値観、行動傾向が類似することを示した研究は、母親と幼児の共感性の高さ (渡辺・瀧口, 1986)、母親と子どもの自己開示の傾向 (小口, 1991)、母親と児童の抑うつ傾向 (菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村, 2002)、短期大学の女子学生と女子学生が認知した親の価値観や性格 (森下, 1979)、親への信頼や同一視欲求の低い中学生と両親の対人特性 (森下, 1982)、小学校5年生の女子児童と母親の言語行動 (松田, 1977) がそれぞれ類似する傾向があることを確認している。これらは、親子の特性や行動の傾向が類似することを示しているが、その類似が遺伝によるものなのか、親と子どもが共有している環境によるものなのかを明らかにするものではない。

親子が類似する原因は遺伝なのか環境なのかという問題について、小高 (1994a) は、親の性格特性は親や子どもの認知した養育態度と関連しているが子どもの性格特性とは関連していないことと、子どもの性格と関連があったのは親の性格や親の認知した養育態度よりも子どもの認知した親の養育態度であることを明らかにしている。また、木内 (1997) は女子大生の自己観に関して、親や家族の影響はほとんど無く、過去の学校生活の影響が大きいらしいとしている。酒井・菅原・菅原・木島・眞榮城・詫摩・天羽 (2003) は一卵性および二卵性の双生児を対象とした調査から、子どもの母親への対人的信頼感は小学生から中学生にかけては共有環境による影響が減少し、遺伝による影響が大きくなる、父親への対人的信頼感に

関しては遺伝と非共有環境が一貫して影響する、という知見を得ている。また、一卵性双生児においても、親の養育態度をあたたかいものとして認知している子どもの方が親への対人的信頼感が高かった。これらは遺伝的な要因だけでなく、養育態度という環境要因を通じて親が子どもに影響することを示すものである。

また、教師と生徒が類似する傾向を示す研究として、森下 (1985) は幼稚園での担任教師が園児のモデルとなり、幼児の攻撃行動・愛他的行動が、教師の示した行動に類似するようになることを明らかにした。教師と生徒の類似については遺伝的な要因が考えられないため、教師と生徒の共有する環境を通じて、教師が子どもに影響を与えているといえる。

(2) 親や教師の期待や教育観が子どもに与える影響

親や教師は子どもに対して「～な人になって欲しい」、「～ができるようになって欲しい」などの期待や教育観、教育目標をもつ。そして人間は自分に対する周囲からの期待に影響を受ける。伊藤・秋津 (1983) は、性別に基づく周囲からの役割期待と中学生、高校生、大学生、成人の男女がもつ性役割観の比較を行い、周囲からの期待によって獲得された性役割ステレオタイプが本人の性役割観に影響することを示した。これは親や教師の期待が子どもに影響を及ぼすことを示唆するものである。ここでは親と教師の期待や教育観、教育目標が子どもに影響を与えることを示した研究を概観する。

(2-1) 親の期待や教育観が子どもに与える影響

親の期待や教育観を扱った研究はこれまで、親の期待や教育観が存在し、それらが親の子どもへの働きかけを規定し、親からの働きかけを受けて子どもが変化することを明らかにしてきた。

親の期待の内容について、Caudill & Weinstein (1969) は、アメリカと日本の母親と乳児の関わりを比較し、アメリカの母親は子どもが自己主張し独立心をもつことを、日本の母親は従順な子どもになることを期待していると述べている。柏木・東 (1977) は就学前の幼児の母親の教育観、発達期待について日米の比較を行い、発達学習課題の重要度の評定については日米にほとんど差はないが、日米の母親の発達期待の差には国民性ともいえる特徴がわずかに見られるとした。さらに、親の期待の認知について、庄司・藤田 (2000) は、大学生を対象に中学生だった時期を振り返ることを求め、子どもが認知している親の養育態度と親の期待の関連を検討した。そして、親の養育態度によって親の期待の認知が異なる

ことを示した。

親の教育観が子どもに対する態度へ与える影響について、渡辺・柏木（1976）は母親の幼児に対する教育観と母親が幼児に対してとる教授スタイルの間に一貫性があること、中でも子どもを統制する行動に母親の教育観が現れやすいことを示し、親の期待や教育観が子どもに対する親の働きかけに影響することを明らかにした。

親の期待は子どもに影響する。小川・田中（1979）、小川・田中（1980）、田中・小川（1981）、田中・小川（1982）は、親の職業を子どもが継承する職業継承という現象について、親の期待が子どもの職業選択の大きな要因となっていることを示した。伊藤（1980）は大学生の娘が将来において希望するキャリアパターン（職経歴）に父親、母親が娘に期待するキャリアパターン、父親、母親の性役割観、娘に対する嫉妬、父母の社会経済的な階層が影響するとした。これらは子どもの認知している親の期待が子どもの職業選択に影響することを示すものである。

親から子どもへの働きかけが子どもに影響を与えることを示す研究の中に親のソーシャル・サポートが子どもの適応に与える影響を扱ったものがある。福岡・橋本（1992）は、子どもが認知した父親、母親のソーシャル・サポートは、子どもの孤独感とは関連していないが、抑うつとは負の相関があることを報告している。また、岡安・嶋田・坂野（1993）は中学生の女子については父親のサポートがストレス軽減効果をもつことを示した。逆に男子に関しては身近にいる人々のソーシャル・サポートがストレス軽減効果をあまり持たなかった。福岡・橋本（1995）は、認知された家族からのソーシャル・サポートと友人からのソーシャル・サポートの高低を組み合わせ、大学生の精神的健康が家族からのサポートと友人からのサポートから異なる影響を受けていることを示した。これについては、男女で異なる特徴も明らかにされている。石毛・無藤（2005）は、中学3年生の受験期の精神的健康にレジリエンスとソーシャル・サポートが与える影響を検討し、本人のレジリエンス以外にも母親、友だち、教師からのサポートがストレス反応を抑制していることを示した。また、女子のストレス反応の抑制にはレジリエンスよりもソーシャル・サポートの方が効果的であった。これらの結果は、親のソーシャル・サポートという働きかけが子どもに影響を及ぼすことを示すものである。

以上の知見から親の価値観、子どもに対する期待、教育観などが子どもに接する際の態度や働きかけ、親子関係に現れ、それらが子どもに影響を与えと考えられる。この過程について、大芦・岡崎・山崎（1996）は、両親

の学歴志向が子どもに対する養育態度につながり、それが結果的に大学生のタイプA行動パターンの発達を促進するというモデルを示している。

（2-2）教師の期待や教育目標が子どもに与える影響

教師の期待や教育観、教育目標を扱った研究も、親の期待や教育観を扱った研究と同様に、教師の期待や教育観、教育目標が存在し、それらが子どもへの働きかけを規定し、教師の働きかけを通じて子どもは教師の影響を受けることを示してきた。

教師の教育観について河村・國分（1996a）は、小学校の教師が児童を管理せねばならないという強迫的な信念を、教師以外の教育関係の職業に就いている社会人、小学校の子どもをもつ社会人と比較して強くもっていることを明らかにした。また、教師が子どもに対してもつ期待や教育観、教育目標は、子どもの目標や適応、行動に影響を与える。鹿毛・上淵・大家（1997）は、自律性支援を重視する教師の信念と授業過程や児童の態度、学習成果の関連を探り、小学校1年生の担任教師の自律性支援の志向性が高いことがクラスでの児童の有能感や学校適応感の高さにつながること、自律性支援の志向性が高い教師は授業においても児童が積極的に参加するような教授方略を使用していることを示した。しかし学習成果については教師の信念による差は見られなかった。河村・國分（1996b）は、小学校教師の強迫的な信念の強さがその教師が担任している学級の児童の学級適応感を部分的に低めることを明らかにした。飯田（2002）は教師が児童に対してもつ「こうあって欲しい」という要請に適合した特性をもつ児童は学級適応感が高いことを明らかにした。これらは教師の期待や教育目標が子どもに影響を与えることを示すものである。

教師の信念や、教育目標、子どもに対する期待は教師の行動を規定する。古城・天根・相川（1982）は、小学校教師の児童に対する期待が児童の学業成績の原因帰属に影響することを示した。速水（1983）は、子どもの学業成績と学業成績に対する教師の原因帰属によって子ども一人一人に対する教授行動が異なることを示した。吉田・坪田・村中・浜名（1996）は、教師の認知や感情によって児童の回答に対する教師のフィードバックが異なることを明らかにした。これらは、教師の子どもに対する期待や評価が子どもに対する働きかけを変化させる可能性を示唆するものである。

教師からの働きかけは子どもに影響を及ぼす。大宮・松田（1987）は、小学校2年生、3年生に対する教師のフィードバックの種類によって児童の内発的動機づけへの影響が異なることを示した。桜井（1991）は、子ども

の年齢に関係なく、数学や算数の苦手な子どもに対し、本当は能力があるのだからもっと努力しなさいという教師の激励が効果的であることを示した。吉田・山下(1987)は、学習場面での積極的な行動やそれに対する評価が小学生、中学生のどちらにおいても学習意欲を促進すること、小学生は友人、親、教師を平等に含んだ他者のネガティブな評価や行動を学習意欲の阻害要因であると考えているのに対し、中学生にとっては教師の行動のみが阻害要因であることを示した。それ以外にも動機づけに関する多くの研究が他者評価の子どもの内発的動機づけへの影響を示している(Hughes, Sullivan, & Beaird, 1986; 鹿毛, 1990, 1993; 鹿毛・並木, 1990; 西松・千原, 1995; 小倉・松田, 1988; 桜井, 1989)。さらに、樽木(1992)は、クラス内の生徒相互のポジティブな評価を教師が伝えることで、中学生の自尊感情が高まることを明らかにした。これらは、教師の一定の働きかけが子どもに影響を与えることを示すものである。しかしながら、渡部・佐久間(1998)は、女子児童が教師に望むサポートと教師が実際に行っているサポートの間にズレがあれば、児童が算数に対して感じている不安が高くなることを示した。これらの知見から、教師のサポートが児童の求めるサポートでなくてはポジティブな効果が期待できない、教師の一定の働きかけが必ずしも全ての子どもに等しくポジティブな影響を与えるわけではないと考えられる。

教師の期待や教育目標、教育観は子どもに対する働きかけを通じて子どもに影響を与える。Deci & Ryan(1980)の認知的評価理論をもとにした教師研究の中でも、Deci, Nezlek, & Shienman(1981), Deci, Schwartz, Sheinman, Koestner, & Ryan(1981), Deci, Spiegel, Ryan, Koestner, & Kauffman(1982)は教師の行動を「統制」と「自律性支持」に分けて検討している。そして統制しようとする教師が児童生徒の自律的な関与感を減少させ、児童生徒の内発的動機づけや自己概念を低めるのに対し、自律性を支持しようとする教師は児童生徒の有能感形成を助け、動機づけや自己概念を高めることを示している。崔(1987)は、教師の生徒に対する期待と生徒の自己期待が生徒の英語学習課題におけるパフォーマンスに及ぼす効果を検討し、教師の期待行動が生徒に認知されることによって生徒の状況特定の自己期待が高まり、それが自信に影響して高いパフォーマンスにつながるのではないかとしている。河村・田上(1997a)は児童への統制、集団志向、管理志向など相対的に強迫的な信念をもっている教師が担任する学級では教師の指導行動は管理の強いものになり、結果として児童のスクール・モラルが低くなることを

明らかにした。三木・山内(2005)は、小学生による教室環境の目標構造に対する認知が個人の達成目標の持ちように影響し、教室の目標構造と個人の目標が個人の学習方略に影響するというプロセスを確認した。

(3) 子どもの親や教師との関係、親や教師の子どもに対する態度の影響

親子関係や親の養育態度、教師生徒関係、教師の指導態度が子どもにもたらす影響を扱った研究では、子どもの性格、対人行動、ソーシャル・スキル、自己評価、適応などへの影響が検討されている。

(3-1) 親子関係、親の養育態度が子どもに与える影響

親子関係、親の養育態度は子どもの性格、対人行動、対人スキル、効力感、自己評価、適応に影響する。親の養育態度と子どもの性格の関連について、小嶋(1967)は、小学6年生が認知する母親の養育態度と子どもの性格特性が関連する傾向を見いだした。山本(1977)は、親子関係の類型と子どもの性格特性の関連について検討し、親子関係が子どもの性格に影響する可能性を示唆した。宮下(1991)は、大学生が回想した母親と父親の自分に対する養育態度と、大学生のナルシズム(自己愛)的傾向の関連を明らかにした。また、小高(1994a)は、親の性格特性と親の子どもに対する態度、子どもの性格特性の関連について検討し、親の性格特性が子どもに対する態度に関連すること、親の子どもに対する態度と子どもの性格特性に関連があることを明らかにした。

親の養育態度と子どもの対人行動や社会的スキル、効力感の関連として、戸ヶ崎・坂野(1997)は、小学生の母親の拒否的な養育態度は子どもの家庭における社会的スキルに悪影響をおよぼし、家庭内での社会的スキルが学校での社会的スキルにつながり、それが結果としてクラス内地位という学校適応感を低下させるというモデルを確認した。文野・藤田(2000)は、小学生をもつ母親の養育態度と子どもの対人行動の関連を検討し、子どもの感じる親の養育態度が子どもの向社会的行動に影響することを明らかにした。酒井(2001)は、就学前の母子関係が青年期の母親、恋人、友人に対する愛着に関連していることを示した。尾形(1995)は、父親の育児参与と幼児の社会生活能力の関連を検討し、父親が育児に参与して子どもの身のまわりの世話をすることが幼児の社会生活能力を高めることを明らかにした。小野寺(1993)は、大学生の独立意識と親子関係の関連についての日米比較を行い、父母との情緒的結びつきが日本の女子学生の将来への不安を弱めるという傾向と、母親と

の情緒的結びつきがアメリカの女子学生の高い独立意識につながるという傾向を確認した。三宅・東（1979）は、母親が子どもに対して行うコミュニケーションのスタイルが、4歳の子どもの図形伝達課題の成績とだけでなく、課題から1、2年後に測定された知能指数、文字、数、空間、お話作りに関連する知的能力などと関連することを示した。

親の養育態度と子どもの自己評価の関連について、Sears（1970）は5歳の時点での親の養育態度と12歳の時点での子どもの自己評価の関連を検討し、幼児期の両親の養育態度が子どもの将来の自己評価に影響することを示した。徳田（1987）は高校1年生の男女を対象に青年の自己評価と両親の養育態度の関連を検討し、父親と息子の関係で同一化（心理的結合）の弱さが心理的自律を促進し、母親と娘の関係では統制性（支配、干渉）の強さが心理的自律を阻害するとした。稲葉・戸田（1999）は母親の養育態度が中学生の自己概念にポジティブな影響と、ネガティブな影響をそれぞれ与えることを示した。清水（1999）は、幼児期の比較的早い時期に母子分離が安定して行われると、12～18年後の自己像の中の自己信頼感が高まることを示した。

また、いくつかの研究で親の養育態度は子どもの適応に影響を与えるとされている。三隅・阿久根（1971）は親子関係における両親のリーダーシップ、それもPM理論におけるM機能が子どもの適応にとって重要であることを示した。松山（1979）はスクール・モラルと両親のリーダーシップの関連を小学校4年生、小学校6年生、中学校3年生において検討し、同様にPM理論におけるM機能がスクール・モラルに影響することを示している。谷井・上地（1994）は、高校生の親の役割行動と高校生の学校適応感に関係があることを明らかにした。酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村（2002）は、中学生が母親、父親と親友に感じている信頼感が学校適応感に与える影響を検討し、子どもが親に対して抱く信頼感が、子どもが親友に対して抱く信頼感以上に学校適応感に影響すること、親との関係がよくない場合に親友との良好な関係が学校適応感に補償的に働くことを示した。ただし、親子が相互に不信感をもっており、親友との信頼感が高い場合には反社会的傾向が高くなることも示されている。谷井（1996）は子どもの不登校の問題をもつ親と、子どもが元気に学校に通っている親の親役割行動について比較し、不登校の子どもをもつ親はそうでない親と比較して親役割行動が少ないという傾向を示した。中学生の不登校傾向と、回想された幼少期の父母への愛着との関連を検討した五十嵐・萩原（2004）の知見は、幼少期の愛着によって、わずかではあるが子どもの不登校傾向

が変化する可能性を示唆するものであった。しかし、板橋（2000）は、一般の母親と不登校児をもつ母親の養育態度を比較したが、一般の母親と不登校児をもつ母親の間に差は見られなかった。北村・無藤（2001）は、成人女性の母親との関係が娘の適応状態を規定する度合いを検討し、娘の婚姻関係の有無、職の有無によって関連は異なるが、母親との関係は娘の心理的適応と関連があるということを明らかにした。孫・松原（1991）は、日本と中国の中学生の親の学習指導態度が子どものテスト不安に与える影響を検討し、中国と日本に共通して、特定の親の態度がテスト不安を高める、または和らげることを示している。親の態度、親子関係によって子どもが影響を受ける過程について、Miller, Bernzweig, Eisenberg, & Fabes（1991）は、統制的な親によって子どもの自己表現が制限され、受容的な親によって子どもの自由な意見や感情の表現が促進されるとしている。宇都宮（2005）は、両親の結婚生活に対するコミットメントが大学および短期大学に通う女子青年の不安に影響することを明らかにした。平山（2001）は、中学生の母親が評定した父親の家庭関与が中学生の精神的健康と関連していることを示した。

（3-2）教師生徒関係、教師の指導態度が子どもに与える影響

教師生徒関係、教師の指導態度が子どもにもたらす影響を検討した研究では、学習成績、学習態度、適応などが教師生徒関係や教師の指導態度から影響を受ける変数として扱われてきた。Cogan（1958）は、教師の融和、親和、愛育などの内容を含む行動が生徒の自発的学習態度と学習量の両方を高めることを明らかにした。Medley & Mitzel（1959）は、小学校のクラスにおいて教師の教室内行動が親和的な教室では、児童の読書能力、グループでの問題解決能力、さらには教師と児童の心理的結びつき、教師の自己評価、校長の評定などが高いことを示した。Ryans（1961a, 1961b）は、小学校、中学校の教師の教室内での行動と子どもの生産的な行動の間に関連があることと、その関連が中学校よりも小学校において強いことを示した。McKeachie, Lin, Milholland, & Isaacson（1966）は教室において示される教師の親和的手がかりが高いと、親和動機の高い大学生の成績が高くなることを示した。Ryan & Grolnick（1986）は児童の認知した学級担任の指導態度を含む教室の雰囲気や児童の内発的動機づけや自己概念を高めることを確認した。河野（1988）は、教師が親和的であることが子どもの学習成績、学習課題および教師に対する好意にポジティブな影響を与えることを明らかにした。

かにした。三隅・吉崎・篠原（1977）、三隅・矢守（1989）は、小学校と中学校の教師の学習を促進させたり課題を解決するのを助けたりする行動を Performance 行動、児童・生徒集団の安定、維持をはかる行動を Maintenance 行動とし、Performance 行動と Maintenance 行動の両方を発揮する PM 型の教師が児童・生徒の学習意欲やスクール・モラルを向上させることを示した。松原（1990）は中学校の部活動における教師のリーダーシップ行動と部活動の諸指標の関連について検討し、「教師－部員関係」、「練習態度」などを優先する場合は、PM 型がもっとも有効なリーダーシップ行動であるのに対し、団体競技において「大会での成績」を重視するのであれば P 型がもっとも有効なリーダーシップ行動であること、個人競技において成績はリーダーシップ行動と関連がないことを示した。

教師の行動や態度で学級の雰囲気が変わることを示す研究として、佐藤・篠原（1976）、吉崎（1978a）、三島・宇野（2004）がある。佐藤・篠原（1976）は、小学校の学級担任教師のリーダーシップの P 機能と M 機能で、学級意識と学級雰囲気が予測できる、P 機能と M 機能を比較した際には M 機能の方が強く作用する、とした。吉崎（1978a）は、小学校の担任教師のリーダーシップの取り方によって、クラス内の児童の勢力構造、学級連帯性、児童の規律遵守度が異なることを明らかにした。三島・宇野（2004）は、小学校高学年の担任教師が学級の雰囲気に及ぼす影響について検討し、教師の「受容・親近」という態度が「意欲」、「楽しさ」という学級雰囲気を高めること、教師の「自信・客観」という態度が「認め合い」の学級雰囲気を高め、「反抗」的な学級雰囲気を低減させることを示した。

教師生徒関係や教師の指導態度の認知によって児童生徒の学級適応は変化する。浜名・松本（1993）は、「受容的・共感的態度」と「自己一致した態度」からなる教師の指導態度を低く感じていた児童に対して、教師が意図的に受容的、共感的で自己一致した態度で接するようにした場合の影響を検討した。その結果、3 週間の間にその児童の教師や級友との関係、学習意欲などの学級適応がポジティブに変化した。佐藤（1993）は、中学校の学級担任教師のリーダーシップが生徒のスクール・モラルにおよぼす影響を検討し、PM 型と評価される担任のクラスの生徒は総じてスクール・モラルが高いという結果を示した。河村・田上（1997b）は、小学校の担任教師について「教師の魅力・対応」を高く、「罰」を低く認知している児童のスクール・モラルが高いことを明らかにした。小野寺・河村（2002）は、中学生の学級担任に対する自己開示が学校生活満足度やスクール・モ

ラルを高めるとした。しかし大久保（2005）は、中学生、高校生の学校適応感に対して「友人との関係」は強く影響を与えているが、「教師との関係」の適応感への影響は校種だけでなく、学校によっても異なるとして、教師との関係が適応感に常に同じように影響するわけではないことを示している。これに関連して小林・仲田（1997）は、小学校 4 年生から 6 年生の中で、学級の雰囲気あまりよくないクラスにおいてのみ「罰」は学校生活の楽しさである学校享受感にネガティブに影響するとしている。ただし、教師の「明朗性」、「信頼・同一化」、「親近感」は一貫して学校享受感にポジティブに影響する要因であることを明らかにした。

河村（1996）は、小学校の教師の性別・年齢、教職経験年数、勤務経験年数、勤務地区などの属性、または学級集団の学年、児童数、継続年数など全てが児童のスクール・モラルと無関係であること、小学生が感じている担任教師の PM 式指導類型によって、教師の勢力資源、児童のスクール・モラルが異なることを示した。スクール・モラルに関しては、PM 型がそれ以外のタイプの担任教師のいるクラスに比べて高かった。河村・田上（1997c）は、小学校で児童が認知した教師の PM 式指導類型と児童のスクール・モラルとの関係について検討した。そして、教室内で他の児童がどう思っているにかかわらず、担任教師の P 型、M 型の両者の指導行動を強く認知している場合にスクール・モラルが高いことを示した。また PM 型の指導行動をとる教師が担任するクラスでは、P 型、pm 型の教師が担任するクラスと比べてスクール・モラルの低い児童の割合が少ないことが確認された。山本・仲田・小林（2000）は、小学生、中学生のどちらにおいても教師関係認知と友人関係認知が学校享受感に直接的にも、ストレス反応を経由して間接的にも影響することを明らかにした。平田・菅野・小泉（1999）は、不登校の中学生が一般の中学生と比較して、学校環境を「学級への親和」が低く、「教師の管理」が少ないと認知していることを明らかにした。これらの結果は、教師が親和的であることと、同時に教師が統制的であることの意義を示唆しているとも考えられる。ただし、吉崎（1978a）は、担任教師のリーダーシップがクラス内の児童の勢力構造に影響する過程について、教師がリーダーシップの P 機能を強く発揮することで目標が明確化し、その明確な目標に向けて求められる能力の個人差がクラス内の児童の勢力を集中させる、もしくはクラス内の児童の勢力の集中化構造は、教師のリーダーシップの P 機能を強化すると解釈できるとした。その上で、担任教師のリーダーシップがクラスに影響を与えると同時にクラスの雰囲気が担任教師のリーダーシップを

規定する可能性に言及している。楠見(1986)も、中学校の担任教師のリーダーシップ行動によって学級集団のソシオメトリック構造が異なるだけでなく、学級集団の構造によって教師のリーダーシップ行動の認知が変化する可能性を示唆している。また、担任教師のリーダーシップおよびクラス内の児童の勢力構造が学級連帯性、規則遵守度に与える影響について、教師のリーダーシップのP機能、M機能がともに弱い場合に、教師の代わりに勢力の中心となる児童がクラスをまとめる可能性があること、担任教師のM機能が強いクラスの中に勢力が集中した児童、つまりリーダー役の児童がいることが児童の規律遵守度を上げる可能性があることをそれぞれ示した。これは、教師ではなく、リーダー役の児童が教師に代わってクラスのまとまりや規律遵守度に影響する可能性を示唆するものである。

さらに、中山(1989)は、児童の動機づけ特性が教師の指導態度の認知に影響を与えることを示した。山口・米田・原野(1993)は教師の指導態度によって、山口(1994)は教師の自己開示性によって、それぞれ中学生がその教師に対して感じる心理的距離が異なることを明らかにした。また、吉崎(1978b)は、小学校の教師のリーダーシップ行動の教師評定と児童評定を比較し、P行動については教師の自己評定と児童による評定にかなり高い関連性があるものの、M行動では教師の自己評定と児童による評定に関連性が見られないことを示した。

佐藤(1993)は、中学校の学級担任教師の学級「集団」と生徒「個人」という異なる次元へのPM式指導類型が生徒のスクール・モラルにおよぼす影響について検討した。また、佐藤・服部(1993)は、小学校の学級担任教師の学級「集団」と児童「個人」という異なる次元へのPM式指導類型が児童のスクール・モラルにおよぼす影響を検討した。これらの研究は共通して、スクール・モラルの内容によって、学級集団への指導類型の規定力が個人への指導類型の規定力に比べて強いものと、集団への指導よりも個人への指導の規定力が強いものがあることを示している。

(3-3) 媒介要因としての親や教師と子どもの関係、親や教師の態度

ここまで概観してきたように、子どもが親や教師から影響を受けることについて、親や教師の期待や教育目標からのアプローチと、親や教師の子どもとの関係、親や教師の子どもに接する態度からのアプローチがなされてきており、それぞれについて多くの知見が得られている。さらに、親や教師の期待や教育目標が子どもにおよぼす影響の大きさが、親子関係、教師生徒関係、または親の

養育態度、教師の指導態度によって異なることを示す研究もある。

親子の類似を検討した研究では、親子の類似性を規定する要因として、親の子どもに対する態度(小口, 1991; 森下, 1982)、子どもの親に対する同一視や親和性(森下, 1979)、親の夫婦関係と家族の機能(菅原他, 2002)、があげられている。今井(1986)は、子どもが親のいうことを守ったり、指示に従ったりする際にその理由となる親の特性を「社会的勢力基盤」と呼び、大学生が両親から影響を受ける際の社会的勢力基盤として、「参照—専門勢力」と「魅力勢力」は「賞—罰勢力」よりも強いこと示した。また、子どもの職業選択希望の形成に親の期待が影響することを示した田中・小川(1981, 1982)は、子どもの親に対する同一視が親の職業期待を自らの職業希望とするかどうかに影響を与えていることを明らかにした。

教師生徒関係について、佐藤・篠原(1976)は、教師のリーダーシップのP機能とM機能の両方が高い際に、教師が学級雰囲気や学級意識に対して大きな影響力をもつことを示した。森下(1985)は幼稚園で男子は担任教師を拒否的だと認知している場合に、担任教師の攻撃行動のモデリングが行われやすいことを、女子は担任教師が受容的だと認知している場合に担任教師の愛他行動のモデリングが行われやすいことを示した。田崎(1979)は教師のいうことを守ったり、指示に従ったりする理由となる教師の特性を「勢力資源」とした。この勢力資源について、浜名・天根・木山(1983)は小学校の教師と児童の双方が影響を与えるあるいは受ける理由として「正当性」をもっとも強く認知していること、次いで「人間的配慮」、「罰」、「外面性」の順に強く認知していることを示した。

第3節 親子関係、教師生徒関係、親の養育態度、教師の指導態度をとらえる枠組み

(1) 親子関係、親の養育態度をとらえる枠組み

親子関係を測定する心理学的尺度として、Schaefer(1965a, 1965b)は、子どもの認知する親の養育態度を測定する尺度、CR-PBI(Children's Report of Parental Behavior Inventory)を開発した。この尺度は「受容—拒否」、「心理的自律性—心理的統制」、「厳しい統制—ゆるい統制」の3つの因子からなる。Schaefer(1965a, 1965b)のCR-PBIは日本にも取り入れられ、小嶋(1967, 1968a, 1968b, 1969, 1970, 1971, 1973, 1975)、辻岡・山本(1975a, 1975b, 1976a, 1976b, 1977, 1978)らをはじめとする親子関係に関する研究に

大きな影響を与えている。小嶋（1968a, 1968b, 1969, 1975）は、子ども用のCR-PBIと親用のPR-PBI（Parents' Report of Parental Behavior Inventory）を用い、子どもの報告と親の報告の間に共通して「心理的統制」, 「受容-拒否」, 「ゆるい統制」の3つの因子を見いだした。辻岡・山本（1976a, 1976b）は、CR-PBIのForm 1（26尺度・260項目）と、その改訂版Form 2（18尺度・192項目）の因子分析により、親子関係の主要な下位概念として「情緒的支持（ES）」, 「同一化（ID）」, 「統制（CO）」, 「自律性（AU）」の4つを明らかにしている。そして、これら4つの因子からなる、「親子関係診断尺度（EICA）」（辻岡・山本 1976a, 1976b）が作成された。この尺度は父-息子, 父-娘, 母-息子, 母-娘のいずれの場合においても用いることのできるものである。さらに辻岡・山本（1978）はEICAの得点から親子関係を10種類に類型化できるとしている。その後、小高（1994b）は、辻岡・山本（1976a）のEICAと同一の項目を用いて、子どもが認知している父親との関係、子どもが認知している母親との関係、父親が認知している子どもとの関係、母親が認知している子どもとの関係のそれぞれの因子構造を男女別に検討した。その結果、全てに共通して、辻岡・山本（1976a）と同じく「情緒的支持」, 「同一化」, 「統制」, 「自律性」の4つの因子が確認された。

また辻岡・山本（1977）は、小嶋（1969）, Kojima（1975）の親と子どものそれぞれが評価した親子関係についてのデータの再分析を行った。その結果、親と子どもとらえた親子関係が情緒的支持の因子（子ども・親）, 統制の因子（子ども・親）, 自律性の因子（子ども・親）, 同一化の因子という7つの因子で分けられることを示した。つまり、親子関係における情緒的支持、統制、自律性のそれぞれについては、子どもと親とで評価が異なる傾向が、同一化については子どもと親の評価が一致する傾向がそれぞれ強いといえる。

この他にも親子関係や親の養育態度、家族の雰囲気をとらえる枠組みにはさまざまなものがある。鈴木・松田・永田・植村（1985）は親の子どもに対する関わり（養育態度）を「受容的・子ども中心的」, 「統制的」, 「責任回避的」の3つの下位概念でとらえられるとした。小野寺（1993）は、父子関係、母子関係のそれぞれを「情緒的結合」, 「統制」の2つの観点でとらえた。板橋（2000）は、「操作的で一貫性のない養育様式」と「無関心で愛情のない養育態度」という2つの下位概念からなるPSS（Parenting Style Scale）で母親の養育態度を測定した。宮下（1991）は、大学生が回想した母親と父親の自分に対する養育態度の因子として、母親、父親とも

に「情緒的支持・受容」, 「情緒不安定」, 「支配・介入」の3つを、家庭の雰囲気の因子として「冷淡・厳格」, 「不誠実・無秩序」, 「内閉・謙虚」の3つを取り上げた。谷井・上地（1993）, 谷井（1996）は、「干渉」, 「受容」, 「分離不安」, 「自立促進」, 「適応援助」, 「自信」の6因子からなるPRAS（Parental Role Assessment Scale）を用いて中学生、高校生の子どもをもつ親の子どもに対する親役割の自己評価を測定している。孫・松原（1991）は、「厳格・干渉」, 「理解・協力」, 「期待・献身」, 「保護・溺愛」の4つの因子で中学生の親の学習指導態度を捉えた。今井（1986）は、子どもが親の影響を受ける理由となる親の特性を「参照-専門勢力」, 「賞-罰勢力」, 「魅力勢力」の3つで捉えた。

落合、佐藤（1996）は中学生、高校生、大学生、大学院生を対象とした調査の結果から青年期の親子関係のあり方として、父親、母親のどちらとの関係についても「親が子を抱え込む関係」, 「親が子を危険から守る関係」, 「子が困ったときには親が支援する関係」, 「親が子と手を切る関係」, 「子が親から信頼・承認されている関係」, 「親が子を頼りにする関係」という6種類の親子関係の得点で発達段階的に捉えることができることを示した。加藤・高木（1980）は、中学生、高校生、大学生の親からの心的な独立意識を「独立性」, 「親への依存性」, 「反抗・内的混乱」の3つの下位概念で測定している。また、家庭の雰囲気や家族システムを捉える枠組みとして、西出・夏目（1997）の家族システムの機能状態を「家族内コミュニケーション」, 「家族システムの柔軟性」, 「家族内ルール」, 「家族に対する評価」, 「家族の凝集性」の5つから測るFAI（Family Assessment Inventory）がある。

（2）教師生徒関係、教師の指導態度をとらえる枠組み

Cogan（1958）, Medley & Mitzel（1959）, Mckeachie et al.（1961）, 河野（1988）は「友好的、親和的」という概念で教師の態度をとらえた。Deci, Nezlek, & Shienman（1981）, Deci, Schwartz, Sheinman, Koestner, & Ryan（1981）, Deci et al.（1982）, Ryan & Grolnick（1986）といった一連の研究は「自律的-統制的」という軸で教師の態度をとらえた。また、Brophy & Good（1974 浜名他訳 1985）, 佐藤・篠原（1976）, 三隅・矢守（1989）は、教師の態度をあたたかさやMaintenanceと統制やPerformanceという2つの軸でとらえようとした。三隅他（1977）は教師のリーダーシップ行動について「教師の生徒に対する配慮」, 「生活・学習における訓練・しつけ」,

「教師の生徒への親近性」,「学習場面における緊急緩和」,「社会性・道徳性の訓練・しつけ」の5因子からなるとした。山口・米田・原野(1993)は,中学生が認知する教師の指導態度を「生徒受容型」と「教師主導型」の2因子でとらえた。三島・宇野(2004)は,小学校高学年の児童の教師認知が,「受容・親近」,「自信・客観」,「怖さ」,「罰」,「たくましさ」からなっているとした。

教師の「勢力資源」について,田崎(1979)は児童生徒が認知する勢力資源が「親近・受容」,「外見の良さ」,「正当性」,「明朗性の魅力」,「罰」,「熟練性」,「同一化」の7つの教師の態度や特性,教師と生徒の関係性からなっていることを示した。これに対し,浜名他(1983)は小学校の教師の勢力資源として教師は「罰」,「外面性」,「人間的配慮」,「正当性」の4つを認知していること,それに対して児童は「人間的配慮」,「罰」,「外面性」の3つを認知していることを明らかにした。この他に,小学校の教師の勢力資源を児童が認知する枠組みとして,河村・田上(1997b)は,「教師の魅力・対応」と「罰」を,小林・仲田(1997)は,「明朗性」,「信頼・同一化」,「親近感」,「外見性」,「罰」の5つを示している。

教師の生徒からの好意や心的距離を扱った研究においても,教師生徒関係,教師の指導態度をとらえる枠組みが提案されている。豊田(1994,1996)は大学および看護学校の女子学生に回想された小学校,中学校,高校の頃の好きだった,もしくは嫌いだった教師像が「信頼感」,「個人的な関わり」,「快活さ」,「厳しい指導」,「授業のうまさ」の5つの因子からなっていることを明らかにした。山口・土屋・藤本(1996)は中学生と高校生が,生徒と教師の心理的距離の改善のために教師に望む行動・態度として「優しい態度」,「面白み」,「教師の力量」,「親しみのある態度」の4つをあげている。落合・佐藤・岡本・国本(1995)では高校生の考える教師に相談して良かったと思う教師の対応として,「親身の対応」,「親しみやすさ」,「決断の是非の指摘」,「幅広い情報の提供」の4つ,相談に行きたい教師の対応として,「親しみやすさ」,「親身の対応」,「判断に役立つ情報の提供」の3つがあげられている。さらに豊田(2000)は大学生に回想された小学校,中学校,高校での好きだった教師と嫌いだった教師の教師像についてその特徴を検討し,「親しみやすさ」,「信頼感」,「明るさ」,「熱心さ」が小学校,中学校,高校に共通する好きだった教師の特徴であることを示している。また,小学校では好きだった教師の特徴として性格の特徴があげられるが,中学校と高校では授業の上手さもあげられることなどを示している。さらに,嫌いだった教師の特徴は小学校から高校までの全てにおいて「自己中心的」が最も有力な特徴であり,中学

や高校では「授業の下手さ」が特徴としてあげられていた。豊田(2003)は大学生がもっている好きな教官像と嫌いな教官像を比較し,好きな教官の特徴として「授業内容のわかりやすさ」と「授業内容を理解させるための適切なスキル」が,嫌いな教官の特徴として「授業の不適切さ」があげられていることを示した。

教師の信念をとらえる枠組みとして,河村・國分(1996a)は,小学校の教師がもつ信念を「児童管理・生活指導に関する因子」,「教師の熱意・公共的使命感に関する因子」,「期待する児童の行動および態度に関する因子」,「児童に期待する教師への信頼感に関する因子」,「権威・役割志向の教師の対応に関する因子」の5つでとらえた。

(3) 親子関係,教師生徒関係の発達的变化

親子関係,教師生徒関係,親の養育態度,教師の指導態度が子どもに影響を与えることを示す研究は,子どもの年齢にかかわらずそれらの影響があることを示している。そして,親や教師と子どもとの関係,親や教師の子どもに接する際の態度をとらえる枠組みとしてさまざまな概念が提案されている。親子関係,教師生徒関係は子どもの発達に伴い親や教師から独立する方向に変化する。それに伴い親の養育態度,教師の指導態度の影響は小さくなっていくことがこれまで示されてきた。

落合・佐藤(1996)によると,青年期の親子関係は「親が子どもを抱え込む親子関係/親が子と手を切る親子関係」,「親が外界にある危険から子どもを守ろうとする親子関係」,「子どもである青年が困った時に,親が助けたり,励まして子どもを支える親子関係」,「子どもが親から信頼・承認されている親子関係」,「親が子どもを頼りにする親子関係」という5つの段階を経て心理的離乳へと向かって発達的に変化していく。さらに,中学生の親子関係と大学生以降の親子関係の間に質的な変換ともいえる大きな変化があり,高校生から大学生のはじめの頃に,親から抱え込まれる,もしくは守られる親子関係から,親から信頼・承認され頼りにされる親子関係へと変化する。渡辺(1989)は,小学校の低学年においてほとんどの児童が親を絶対的な権力の持ち主として見なしているが,4年生以降は,徐々に仲間の権威を親や教師といった大人の権威よりも高くとらえるようになっていくことを示した。

宮野(1984)によると,親の社会的および反社会的な意見や態度のどちらに対しても中学生の親への同調と対立がそれぞれ見られ,青年期における親への反抗は単なる非行というだけではなく,親子関係における青年の主体性のあらわれでもある。このような同調や対立を繰り返

返しながら独立へと向かう中学生から高校生にかけての親子関係の変化についてこれまで次のような知見が示されてきた。中学生と高校生では家族に対して感じている心的距離が異なり、中学生の方が家族を心的に近い存在としてとらえている(天貝, 1996)。中学生、高校生の親子関係は中学低学年で見られる子どもが親を信頼、依存する段階から、中学中学年から高校中学年にかけて、親への反発と批判が強まる時期を経て、高校高学年以降は親子の理解と受容が強まり親子関係が再び安定する(谷井・上地, 1993)。この依存から反発を経て、再び受容しあうようになる段階の変化について岡本・上地(1999)は、中学生と高校生の親イメージと友人イメージの発達的变化について以下のような傾向を示した。第2の個体化が行われる青年期において、児童期以前に理想化された親イメージが崩れるが高校で再び理想的な存在として捉えられるようになる。愛情対象が親から友人へ移行するのではなく、親への心理的な依存関係から離脱しつつも、母親との一体感は保ちつつ、友人との親密な関係を築く。しかし、加藤・高木(1980)は、中学生、高校生、大学生の独立意識から親子関係の発達的变化を検討した結果、男女とも独立意識の校種による発達的变化はほとんど見られないとしており、他の研究と整合的でない。ただし、女子に関しては、中学生よりも、高校生、大学生において「親への依存」が強くなる、としており、これは一旦反抗と混乱を経た親子関係が再びお互いが受容する方向で安定していくとする他の知見と整合的である。また、独立意識と自己概念には関連があることを明らかにしている。独立意識の高さの自己概念に対するポジティブな影響だけでなく、ネガティブな影響も見られた。これについて加藤・高木(1980)は、反抗や内的混乱は個人の独立性を獲得する上で必要な段階であるが、その時点では社会的にあまり望ましくない不適応の状況にあると考察している。

教師生徒関係の発達的变化として、浜名他(1983)は教師の「罰」と「外面性」による児童への影響は学年の進行とともに低く評価されるようになり、それらにかかわって「人間的配慮」が影響力を強くもつようになるとしている。河村・田上(1997b)では、小学校4年生、5年生、6年生を比較すると、6年生は教師の勢力資源として、「教師の魅力・対応」を低く評価することが示されている。

親子関係や教師生徒関係の発達的变化に伴い、子どもに対する親からの影響、教師からの影響の大きさは変化する。藤原(1976)は、子どもが周囲へ同調する傾向の発達的变化について扱い、次のような特徴を明らかにした。児童期前期の外界の圧力に影響されやすい子どもは

身体的、精神的発達にともない、主体的な判断を確立していく。児童期前期では、母親や教師へ同調しやすいが、児童期中期にかけて仲間への同調が次第に高くなる。青年期前期では集団圧力源の違いによる同調の差異は見られなくなる。そして青年期中期にいたって、教師への同調が高くなる。これらはつまり児童期前期から青年期中期に至るまでの間に、親や教師からの影響の受け方も発達的に変化することを示唆するものである。Ryans(1961a, 1961b)は、小学校の方が中学校よりも教師の教室内での行動と子どもの生産的な行動の間の関連が強いことを示した。河野(1988)は学習者の年齢が高くなると学習に対する適応力が高くなり、教師の教室内行動の影響が小さくなるとしている。これは小学校の方が中学校や高校に比べ教師生徒関係が子どもに大きな影響を及ぼす可能性を示唆するものである。天貝(1997)は、成人期から老年期にかけての信頼感の発達の変化と家族および友人からのサポート感が信頼感におよぼす影響を検討し、青年期または成人期の初期段階以降において、家族や友人とのやりとりやサポート感からさほど多くの影響を受けないとしている。

第4節 親の威厳ある養育態度と、教師の威厳ある指導態度

(1) 親の威厳ある養育についての研究

親子関係についての研究においては、親子関係や親の養育態度が、子どもに影響を与えることが示されてきた。そのような研究の中で親子関係を威厳ある養育(authoritative parenting)という概念を用いてとらえる試みがなされている。この威厳ある養育という概念はBaumrind(1967)が社会化のコンピテンスを検討する中で提唱したものである。Maccoby & Martin(1983)は、威厳ある養育を反応性(responsiveness)と要求(demandingness)の組み合わせとしたが、のちにSteinberg, Lamborn, Dornbusch, & Darling(1992)は、威厳ある養育態度を①両親の受容もしくは暖かさ、②行動の監督と厳しさ、③心理的な自律性の尊重もしくはデモクラシー、の平行した3次元からなるとした。

この親の威厳ある養育に関する一連の家族関係研究は、親が家庭において「威厳」を示していることの有効性を確認している。Dornsbuch, Ritter, Leiderman, Roberts, & Fraleigh(1987)は、自分の親のことを「権威主義的(統制はとれているが受容が低い)」でも「自由放任(受容は高いが統制は低い)」でもなく、「威厳がある(受容と統制のどちらもが高い)」と評価した高校生が良い成績を取っていることを示した。

Baumrind (1991) は威厳ある親の家庭で育てられた青年は動機づけやコンピテンス、達成志向の傾向、数学と言語テストの成績がもっとも高く、問題行動の発生率はもっとも低いとしている。そして、権威主義的な養育態度は子どもの独立心や社会的責任を抑制し、自由放任な養育態度は分別や衝動に対するコントロール、自信、独立心、責任感を抑制するとしている。Lamborn, Mounts, Steinberg, & Dornbusch (1991) によると、親に威厳がある家庭の子どもは心理社会的コンピテンスが高く、心理的および行動的な機能障害 (dysfunction) をあまり示さない。これに対して無関心な家庭の子どもは親に威厳がある家庭の子どもと逆の傾向を示した。そして権威主義的な親の養育態度と甘やかす養育態度にはポジティブな影響とネガティブな影響のどちらもがあることが示された。権威主義的な家庭の子どもは学校ではよい振る舞いをし、仲間よりも逸脱行動が少ないが、他の子どもより自信と社会的、学業的能力が低かった。過保護な親の子どもは自己受容や自信は高いが、問題行動が多く、学校の活動へ積極的に参加しない。これらの結果は家族構成に関係なく一貫して示された。Steinberg, Lamborn, Dornbusch, & Darling (1992) は受容、監督、心理的な自律性の尊重がいずれも高い威厳ある養育活動は青年の学校でのより高い達成の程度とより強い学校活動への従事につながることを示した。そして、Strage & Brandt (1999) は親の自律性の尊重、要求、支援からなる威厳ある養育態度が幼年期から青年期にかけてだけでなく、大学生においても一貫してみられるものであることを示した上で、人種や性別その他の人口統計上のカテゴリーに関係なく一貫して大学生の成績、自信、辛抱強さ、課題への関与、教師との親密さを予想する、としている。

(2) 親の威厳ある養育態度と教師の威厳ある指導態度についての研究の提案

親の威厳ある養育態度についての研究は一貫して、子どもにポジティブな影響を与えることを示唆してきた。しかしここまで概観してきたように、日本では親の養育態度を威厳ある養育態度の下位概念である「受容」、「統制」、「心理的自律性の尊重」の3側面でもとらえられることはなかった。また、その3つが揃って高い場合に、子どもにポジティブな影響を及ぼすのかについてはほとんど検討されていない。しかしながら、親が子どもに対して受容的であること (松山, 1979; 三隅・阿久根, 1971; 小野寺, 1993; 谷井・上地, 1994; 戸ヶ崎・坂野, 1997)、自律性を尊重していること (清水, 1999; 谷井・上地, 1994)、受容的かつ統制的であること (文野・藤田,

2000)、サポーターティブであること (福岡・橋本, 1992, 1995; 石毛・無藤, 2005; 岡安他, 1993) などの有効性を示唆する知見はそれぞれ得られており、3つの下位概念が揃って高い場合に子どもにポジティブな影響を与える可能性は示唆されている。また、遠山 (2005a, 2005b, 2005c) において回想的な方法で評定された親の威厳ある養育態度のポジティブな影響が部分的に示されている。今後日本でも親の威厳ある養育態度についてさらに研究していく意義はあると思われる。

これまでの教師の態度が子どもに与える影響を扱った研究では、教師の威厳ある指導態度として親の威厳ある養育態度の下位概念を援用した研究は見られない。親と教師の子どもに対するコミュニケーションの違いについて、大嶋・三宅・Dickson・東・Hess (1982) は、日米の幼稚園・保育園で教師と母親の子どもに対するコミュニケーションスタイルが異なること、特にアメリカよりも日本において教師と親の差が顕著であることを明らかにしている。つまり子どもに対するコミュニケーションスタイルについては親と教師では異なることが予想される。しかし、これまで概観してきた教師生徒関係についての研究は、教師が受容的であること (Cogan, 1958; 浜名・松本, 1993; 河野, 1988; 小林・仲田, 1997; McKeachie, et al., 1966; Medley & Mitzel, 1959; 三島・宇野, 2004; 山本他, 2000)、児童生徒の自律性を尊重すること (Deci, Nezlek, & Shienman, 1981; Deci, Schwartz, Sheinman, Koestner, & Ryan, 1981; Deci et al. 1982; 鹿毛他, 1997)、または教師が受容的でありながら、同時に統制的であること (河村, 1996; 河村・田上, 1997c, 平田他, 1999; 松原, 1990; 三隅・矢守, 1989; 三隅他, 1977; 佐藤, 1993; 佐藤・篠原, 1976; 吉崎, 1978a) が、子どもにポジティブな影響を与えることをそれぞれ示唆している。浜名・北山 (1988) は、それまでの教師の指導態度の児童生徒への影響について扱った研究から、教師の方から児童生徒の内面に近づき、児童生徒を受け入れ、児童生徒の側に立つとともに問題に対処していこうとする教師のポジティブな態度を組み合わせた複合的な態度が児童生徒の態度や行動にポジティブな変化をもたらすとしている。また、豊田・三木 (1996) は大学生がもつ小学校、中学校、高校の理想的な教師像の特徴について検討し、中学校と高校の教師については「干渉しすぎない」、「対等につきあう」といった生徒の人格を尊重する特性を大学生があげていることを示している。これらの知見は、受容と統制に類するP機能、M機能でとらえた教師のリーダーシップという枠組みだけでは子どもにとって望ましい教師の指導態度が十分にとらえられない可能性を示唆している。

平成10年12月に告示され、15年12月一部改正された小学校学習指導要領（文部科学省，2004a）と中学校学習指導要領（文部科学省，2004b），そして平成11年3月告示され、14年5月，15年4月，15年12月に一部改正された高等学校学習指導要領（文部科学省，2004c）の全てにおいて，その第1章総則の中に「自ら学び自ら考える力の育成を図る」，また「自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」とある。つまり「自分で考え，決断する」子どもを育てる可能性のある「心理的自律性の尊重」を含めた教師の指導態度について検討する意義はあると思われる。以上の理由から「受容」と「統制」，「心理的自律性の尊重」の全てが高い状態にある教師の指導態度を，教師の威厳ある指導態度として，子どもに与える影響について，今後検討していく意義はあると考えられる。

本稿では，親と教師を子どもに影響を与える存在，子どもを教育する存在として位置づけ，親と教師のどのような要因が子どもに影響を与えるのか，またその影響の大きさを規定する要因が何なのかについて，親子関係，教師生徒関係，親の養育態度，教師の指導態度が扱われている心理学的研究を中心に概観してきた。親の養育態度については，「受容」，「統制」，「心理的自律性の尊重」が揃って高いという威厳ある養育態度が一貫して子どもに対してポジティブな影響を与えるという知見が得られていながら，日本の心理学的研究ではこの親の威厳ある養育態度を扱ったものが見られない。このことから，今後この威厳ある養育態度についてさらに研究を進める必要があると思われる。また，教師の指導態度についても，「受容」，「統制」，「心理的自律性の尊重」のそれぞれが子どもにポジティブな影響を与えることがこれまでの知見において示唆されているが，「受容」，「統制」，「心理的自律性の尊重」が揃って高いという威厳ある指導態度が子どもに対してポジティブな影響を与えるかどうかは未だ検討されていない。以上のような理由から教師の威厳ある指導態度についても，研究を進めていく意義はあると思われる。そして，親の威厳ある養育態度と教師の威厳ある指導態度が子どもにどのような影響を与えているのかについて，複合的に扱う研究が待たれる。

引用文献

- 秋田喜代美 1992 小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響 発達心理学研究, 3, 90-99.
- 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究, 29, 130-134.
- 天貝由美子 1997 成人期から老年期に渡る信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響— 教育心理学研究, 45, 79-86.
- Ames, C. 1992 Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, 84, 261-271.
- 安藤寿康 1996 子どもの読書行動に家庭環境が及ぼす影響に関する行動遺伝学的検討 発達心理学研究, 7, 170-179.
- Baumrind, D. 1967 Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Baumrind, D. 1991 Parenting styles and adolescent development. In J. Brooks-Gunn, R. Lerner, & A. C. Peterson (Eds.), *The Encyclopedia of Adolescence*. New York: Garland. pp.746-758.
- Brophy, J. E., & Good, T. L. 1974 Teacher-student relationships: Causes and consequences. New York: Holt. (浜名外喜男・蘭千壽・天根哲治（共訳） 1985 教師と生徒の人間関係—新しい教育指導の原点— 北大路書房)
- Caudill, W. & Weinstein, H. 1969 Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, 32, 12-45.
- Cogan, M. L. 1958 The behavior of teachers and the productive behavior of their pupils : 1 "perception" analysis. *Journal of Experimental Education*, 27, 89-105.
- Deci, E. L., Nezlek, J., & Sheinman, L. 1981 Characteristics of the rewarder and intrinsic motivation of the rewardee. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 1-10.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1980 The empirical exploration of intrinsic motivational process. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, 13, New York: Academic Press. pp.39-80.
- Deci, E. L., Schwartz, A. J., Sheinman, L., Koestner, R., & Ryan, R. M. 1981 An instrument to assess adults' orientations toward control versus autonomy with children: Reflections on intrinsic motivation and perceived competence. *Journal of Educational Psychology*, 73, 642-650.
- Deci, E. L., Spiegel, N. H., Ryan, R. M.,

- Koestner, R., & Kauffman, M. 1982 Effects of Performance standards on teaching styles: Behavior of controlling teachers. *Journal of Educational Psychology*, 74, 852-859.
- Dornbusch, S., Ritter, P., Liederman, P., Roberts, D., & Fraleigh, M. 1987 The relation of parenting style to adolescent school performance. *Child Development*, 58, 1244-1257.
- 藤原正光 1976 同調性の発達の变化に関する実験的研究—同調性におよぼす仲間・教師・母親からの集団圧力の効果— 心理学研究, 47, 193-201.
- 福岡欣治・橋本 幸 1992 個人のもつ特定のサポート源に関するソーシャル・サポートの測定 健康心理学研究, 5, 32-39.
- 福岡欣治・橋本 幸 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43, 185-193.
- 文野佐紀・藤田尚文 2000 親の養育態度が子どもの対人行動に及ぼす影響 高知大学教育学部研究報告, 2, 59, 43-54.
- 浜名外喜男・天根哲治・木山博文 1983 教師の勢力資源とその影響度に関する教師と児童の認知 教育心理学研究, 31, 220-228.
- 浜名外喜男・北山鎮道 1988 教師行動の実験的変容が児童の学級適応感におよぼす影響 兵庫教育大学研究紀要, 8, 63-73.
- 浜名外喜男・松本昌弘 1993 学級における教師行動の変化が児童の学級適応に与える影響 実験社会心理学研究, 33, 101-110.
- 速水敏彦 1983 子どもの学業成績に対する教師の原因帰属と教授行動の関係 教育心理学研究, 31, 314-318.
- 平田乃美・菅野 純・小泉英二 1999 不登校中学生の学校環境認知の特性について カウンセリング研究, 32, 124-133.
- 平山聡子 2001 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連: 父母評定の一致度からの検討 発達心理学研究, 12, 99-109.
- Hughes, B. J., Sullivan, H. J., & Beaird, J. 1986 Continuing motivation of boys and girls under differing evaluation and achievement levels. *American Educational Research Journal*, 23, 660-667.
- 五十嵐哲也・荻原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-276.
- 飯田 都 2002 教師の要請が児童の学級適応感に与える影響—児童個々の認知様式に着目して— 教育心理学研究, 50, 367-376.
- 今井 芳昭 1986 親子関係における社会的勢力の基盤 社会心理学研究, 1, 35-41.
- 稲葉珠樹・戸田須恵子 1999 中学生の自己概念と母親の養育態度の関係について 釧路論集, 31, 223-237.
- 石毛みどり・無藤 隆 2005 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, 53, 356-367.
- 板橋登子 2000 不登校児をもつ母親の養育態度と自己像 カウンセリング研究, 33, 8-17.
- 伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度—大学生の職経歴選択を中心に— 教育心理学研究, 28, 67-71.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146-151.
- 鹿毛雅治 1990 内発的動機づけに及ぼす評価主体と評価基準の効果 教育心理学研究, 38, 428-437.
- 鹿毛雅治 1993 到達度評価が児童の内発的動機づけに及ぼす効果 教育心理学研究, 41, 367-377.
- 鹿毛雅治・並木 博 1990 児童の内発的動機づけと学習に及ぼす評価構造の効果 教育心理学研究, 38, 36-45.
- 鹿毛雅治・上淵 寿・大家まゆみ 1997 教育方法に関する教師の自律性支援の志向性が授業過程と児童の態度に及ぼす影響 教育心理学研究, 45, 192-202.
- 柏木恵子・東 洋 1977 日米の母親における幼児への発達期待及び就学前教育観 教育心理学研究, 25, 242-253.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 河村茂雄 1996 教師のPM式指導類型と勢力資源及び児童のスクール・モラルとの関係についての調査研究 カウンセリング研究, 29, 187-196.
- 河村茂雄・國分康孝 1996a 小学校における教師特有のビリーフについての調査研究 カウンセリング研究, 29, 44-54.
- 河村茂雄・國分康孝 1996b 教師にみられる管理意識と児童の学級適応感との関係についての調査研究 カウンセリング研究, 29, 55-59.
- 河村茂雄・田上不二夫 1997a 教師の教育実践に関するビリーフの強迫性と児童のスクール・モラルとの関係 教育心理学研究, 45, 213-219.

- 河村茂雄・田上不二夫 1997b 児童のスクール・モラールと担任教師の勢力資源認知との関係についての調査研究 カウンセリング研究, 30, 11-17.
- 河村茂雄・田上不二夫 1997c 児童が認知する教師のPM式指導類型と児童のスクール・モラールとの関係についての考察 カウンセリング研究, 30, 121-129.
- 河野義章 1988 教師の親和的手がかりが子どもの学習に及ぼす効果 教育心理学研究, 36, 161-165.
- 北村琴美・無藤 隆 2001 成人の娘の心理的適応と母娘関係: 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理学研究, 12, 46-57.
- 木内亜紀 1997 女子大生とその母親の相互独立・相互協調的自己観—質問紙法による形成要因と葛藤状況の比較検討— 教育心理学研究, 45, 183-191.
- 小林正幸・仲田洋子 1997 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響に関する研究—学級の雰囲気に応じて教師はどうすればよいのか— カウンセリング研究, 30, 207-215.
- 小高 恵 1993 親子関係の年代的推移—25年前と現在の親子関係についての正準判別構造と平均・標準偏差の比較— 教育心理学研究, 41, 192-199.
- 小高 恵 1994a 親子関係と人格要因との関連性についての一考察 性格心理学研究, 2, 47-55.
- 小高 恵 1994b 親子間の認知構造の因子分析的心理学研究, 65, 95-102.
- 小嶋秀夫 1967 子どもによる親の養育態度・行動の報告—セマンティック・ディファレンシャル, 質問紙と人格要因— 金沢大学教育学部紀要, 人文・社会・教育科学編, 16, 47-61.
- 小嶋秀夫 1968a 親の養育態度・行動の心理学的測定 社会教育研究 (金沢大学社会教育研究室), 9, 157-170.
- 小嶋秀夫 1968b 親子関係検査のバッテリー間因子分析—質問紙とセマンティック・ディファレンシャル— 金沢大学教育学部紀要, 人文・社会・教育科学編, 17, 29-43.
- 小嶋秀夫 1969 親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析 金沢大学教育学部紀要, 人文・社会教育科学編, 18, 55-70.
- 小嶋秀夫 1970 親の行動インヴェントリー (PBI) の検討—Balanced Scale— 金沢大学教育学部紀要, 人文・社会教育科学編, 19, 129-144.
- 小嶋秀夫 1971 幼児の知的機能とインヴェントリーで測った母親の態度・行動 金沢大学教育学部紀要, 人文・社会教育科学編, 20, 29-44.
- 小嶋秀夫 1973 母親の態度行動と小学生のアチーブメント—探索的研究— 金沢大学教育学部紀要, 人文・社会教育科学編, 22, 73-88.
- Kojima, H. 1975 Inter battery factor analysis of parents' and children's reports of parental behavior. *Japanese Psychological Research*, 17, 33-48.
- 古城和敬・天根哲治・相川 充 1982 教師期待が学業成績の原因帰属に及ぼす影響 教育心理学研究, 30, 91-99.
- 楠見幸子 1986 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級雰囲気, 学校モラールに関する研究 教育心理学研究, 34, 104-110.
- 崔 光善 1987 教師の生徒に対する期待と生徒の自己期待がパフォーマンスに及ぼす効果 心理学研究, 58, 181-185.
- Lamborn, S. D., Mounts, N. S., Steinberg, L., & Dornbusch, S. M. 1991 Patterns of competence and adjustment among adolescents from authoritative, authoritarian, indulgent, and neglectful families. *Child Development*, 62, 1049-1065.
- Maccoby, E., & Martin, J. 1983 Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In E. M. Hetherington (Ed.), P. H. Mussen (Series Ed.), *Handbook of Child Psychology: Vol. 4. Socialization, Personality, and Social Development*. New York: Wiley. pp.1-101.
- McKeachie, W. J., Lin, Y.-G., Milholland, H., & Isaacson, R. L. 1966 Student affiliation motives, teacher warmth, and academic achievement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 457-461.
- Maehr, M. L., & Midgley, C. 1991 Enhancing student motivation: A school wide approach. *Educational Psychologist*, 26, 399-427.
- 松原敏浩 1990 部活動における教師のリーダーシップ・スタイルの効果—中学校教師の視点からのアプローチ— 教育心理学研究, 38, 312-319.
- 松田 惺 1977 母親言語行動の模倣における母親同一視要因の影響 心理学研究, 48, 208-215.
- 松山安雄 1979 学級におけるスクール・モラールに関する研究 (第3報)—スクール・モラールと達成動機および親の指導性との関係— 大阪教育大学紀要 (第IV部門), 28, 19-28.

- Medley, D.M., & Mitzel, H.E. 1959 Some behavioral correlates of teacher effectiveness. *Journal of Educational Psychology*, 50, 239-246.
- 三木かおり・山内弘継 2005 教室の目標構造の知覚, 個人の達成目標志向, 学習方略の関連性 心理学研究, 76, 260-268.
- Miller, P. A., Bernzweig, J., Eisenberg, N., & Fabes, R. A. 1991 The development and socialization of prosocial behavior. In R. Hinde & J. Groebel (Eds.), *Cooperation and prosocial behavior*. New York: Cambridge University Press. pp.54-77.
- 三島美砂・宇野宏幸 2004 学級雰囲気及ぼす教師の影響 教育心理学研究, 52, 414-425.
- 三隅二不二・阿久根求 1971 両親の指導性が児童の学業成績, テスト不安と適応性に及ぼす効果 教育・社会心理学研究, 10, 157-168.
- 三隅二不二・矢守克也 1989 中学校における学級担任教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性に関する研究 教育心理学研究, 37, 46-54.
- 三隅二不二・吉崎静夫・篠原 忍 1977 教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性の研究 教育心理学研究, 25, 157-166.
- 三宅なほみ・東 洋 1979 母親のコミュニケーションスタイルとその子供の認知発達に及ぼす影響—図形伝達課題における日米比較— 教育心理学研究, 27, 75-84.
- 宮野祥雄 1984 青年期における親への同調と対立に関する研究 心理学研究, 55, 261-267.
- 宮下一博 1991 青年におけるナルシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- 文部科学省 2004 a 小学校学習指導要領—平成10年12月— 国立印刷局(編)
- 文部科学省 2004 b 中学校学習指導要領—平成10年12月— 国立印刷局(編)
- 文部科学省 2004 c 高等学校学習指導要領—平成11年3月— 国立印刷局(編)
- 森下正康 1979 子どもの親に対する親和性と親子間の価値観および性格の類似性 心理学研究, 50, 145-152.
- 森下正康 1982 中学生における親の養育態度と対人特性の同一視 教育心理学研究, 30, 142-146.
- 森下正康 1985 幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング—教師モデルに関する受容的・拒否的態度— 心理学研究, 56, 138-145.
- 中山勘次郎 1989 児童の動機づけ志向性と教師の指導態度の認知 教育心理学研究, 37, 276-282.
- 西出隆紀・夏目良司 1997 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究, 45, 456-463.
- 西松秀樹・千原孝司 1995 教師による個人内評価と自己評価が生徒の内発的動機づけに及ぼす効果 教育心理学研究, 43, 436-444.
- 大芦 治・岡崎奈美子・山崎久美子 1996 タイプA行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向および養育態度の影響 発達心理学研究, 7, 41-51.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 落合良行・佐藤有耕・岡本政博・国本勝正 1995 進路相談において生徒に望まれる教師の対応 教育心理学研究, 43, 445-454.
- 尾形和男 1995 父親の育児と幼児の社会生活能力—共働き家庭と専業主婦家庭の比較— 教育心理学研究, 43, 335-342.
- 小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281.
- 小川一夫・田中宏二 1980 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 28, 328-331.
- 小口孝司 1991 母親の自己開示と養育態度が子どもの自己開示と学級集団への適応に及ぼす効果 社会心理学研究, 6, 175-183.
- 小倉泰夫・松田文子 1988 生徒の内発的動機づけに及ぼす評価の効果 教育心理学研究, 36, 144-151.
- 岡本清孝・上地安昭 1999 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47, 248-258.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 大宮俊恵・松田文子 1987 児童の内発的動機づけに及ぼす教師の外的強化の効果 教育心理学研究, 35, 1-8.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, 64, 147-152.
- 小野寺正己・河村茂雄 2002 中学生の学級内における

- 自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究 カウンセリング研究, 35, 47-56.
- 大嶋百合子・三宅なほみ・Dickson, W., P.・東 洋・Hess, R., D. 1982 図形伝達課題における表現形式—日米の母親と教師の比較— 心理学研究, 53, 207-213.
- Roeser, R. W., Midgley, C., & Urdan, T. C. 1996 Perception of the school psychological environment and early adolescents' psychological and behavioral functioning in school: The mediating role of goals and belonging. *Journal of Educational Psychology*, 88, 408-422.
- Ryan, R.M., & Grolnick, W.S. 1986 Origins and pawns in the classroom: Self-report and projective assessments of individual differences in children's perceptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 550-558.
- Ryans, D.G. 1961a Some relationships between pupil behavior and certain teacher characteristics. *Journal of Educational Psychology*, 52, 82-90.
- Ryans, D.G. 1961b Inventory estimated teacher characteristics as covariates of observer assessed pupil behavior. *Journal of Educational Psychology*, 52, 91-97.
- 酒井 厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, 9, 59-70.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 酒井厚・菅原ますみ・菅原健介・木島伸彦・眞榮城和美・詫摩武俊・天羽幸子 2003 子どもによる親への対人的信頼感: 児童・思春期の双生児を対象とした人間行動遺伝学的検討 発達心理学研究, 14, 191-200.
- 桜井茂男 1989 内発的動機づけに及ぼす外的評価の予告と報酬予期の効果 教育心理学研究, 37, 29-35.
- 桜井茂男 1991 子どもの動機づけに及ぼす教師の激励の効果 心理学研究, 62, 31-38.
- 佐藤典子 2005 音楽大学への進学理由と進学後の適応に影響を与える諸要因の検討—音楽経験と家庭の音楽環境および家族のサポートについて— 教育心理学研究, 53, 49-61.
- 佐藤静一 1993 学級「集団」・生徒「個人」次元の学級担任教師のPM式指導類型が生徒の学校モラルにおよぼす交互作用効果 実験社会心理学研究, 33, 52-59.
- 佐藤静一・服部 正 1993 学級「集団」・児童「個人」次元の学級担任教師のPM式指導類型が児童の学校モラルにおよぼす交互作用効果 実験社会心理学研究, 33, 141-149.
- 佐藤静一・篠原弘章 1976 学級担任教師のPM式指導類型が学級意識及び学級雰囲気におよぼす効果—数量化理論第Ⅱ類による検討— 教育心理学研究, 24, 235-246.
- Schaefer, E. S. 1965a Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424.
- Schaefer, E. S. 1965b A configurational analysis of children's report of parental behavior. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 552-557.
- Sears, R. R. 1970 Relation of early socialization experiences to self-concepts and gender role in middle childhood. *Child Development*, 41, 267-289.
- 清水弘司 1999 幼児期の母子分離型と青年期の自己像: 連続性と転機を検討 発達心理学研究, 10, 1-10.
- 孫 旭丹・松原達哉 1991 中学生のテスト不安と親の学習指導態度に関する研究—中国と日本との比較— カウンセリング研究, 24, 101-110.
- Steinberg, L., Lamborn, S. D., Dornbusch, S. M., & Darling, N. 1992 Impact of parenting practice on adolescent achievement: Authoritative parenting, school involvement, and encouragement to succeed. *Child Development*, 63, 1266-1281.
- Strage, A., & Brandt, T. S. 1999 Authoritative parenting and college students' academic adjustment and success. *Journal of Educational Psychology*, 91, 146-156.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として— 教育心理学研究, 50, 129-140.
- 鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 1985 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告, 34, 139-152.

- 庄司知明・藤田尚文 1999 子どもから見た親の期待について－親子関係診断尺度（EICA）との関連から－ 高知大学教育学部研究報告, 2, 59, 55-68.
- 田中宏二・小川一夫 1981 親の期待と親への同一視が看護職の継承に及ぼす影響 教育心理学研究, 29, 166-170.
- 田中宏二・小川一夫 1982 教師職選択に及ぼす親の影響－子の認知した親の期待と職業モデル－ 教育心理学研究, 30, 257-262.
- 谷井淳一 1996 登校拒否の子どもをもつ親の親役割行動の特徴 カウンセリング研究, 29, 60-67.
- 谷井淳一・上地安昭 1993 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究, 26, 113-122.
- 谷井淳一・上地安昭 1994 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.
- 樽木靖夫 1992 中学生の自己評価に及ぼす担任教師によるフィードバックの効果 教育心理学研究, 40, 130-137.
- 田崎敏昭 1979 児童・生徒による教師の勢力資源の認知 実験社会心理学研究, 18, 129-138.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1997 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響－積極的拒否型の養育態度の観点から－ 教育心理学研究, 45, 173-182.
- 遠山孝司 2005a 親と教師の威厳ある態度の子どもへの影響－威厳ある態度と学習動機づけ, 学校適応感の関連－ 東海心理学会第54回大会発表論文集, 54.
- 遠山孝司 2005b 親と教師の威厳ある態度と子どもの性格の関連－高校での親と教師の態度と大学生の性格について－ 日本心理学会第69回大会発表論文集, 1271.
- 遠山孝司 2005c 親と教師の威厳ある態度が子どもの社会的側面に与える影響－高校での親と教師の態度と大学生の攻撃性, 進路選択効力感, 信頼感の関連－ 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 310.
- 徳田完二 1987 青年期における自己評価と両親の養育態度 心理学研究, 58, 8-13.
- 豊田弘司 1994 回想による教師像と教師に対する印象の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, 30, 93-98.
- 豊田弘司 1996 回想された好きな教師と嫌いな教師像 奈良教育大学教育研究所紀要, 32, 125-131.
- 豊田弘司 2000 好かれる教師像と嫌われる教師像 奈良教育大学教育研究所紀要, 36, 65-71.
- 豊田弘司 2003 大学教授の好かれる特徴と嫌われる特徴－評定尺度による検討－ 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 12, 31-35.
- 豊田弘司・三木 馨 1996 理想的な教師像における大学生と教師の違い 奈良教育大学教育研究所紀要, 32, 133-136.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976a 親子関係診断尺度 EICA の作成－因子的真実性の原理による項目分析－ 関西大学社会学部紀要, 7(2), 1-14.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976b 親子関係診断尺度 EICA 検査用紙および実施手引 日本心理テスト研究所.
- 辻岡美延・山本吉廣 1977 親子関係の相互認知－小嶋氏の原資料の分析－ 教育心理学研究, 25, 18-29.
- 辻岡美延・山本吉廣 1978 親子関係の類型－親子関係尺度 EICA－ 教育心理学研究, 26, 84-93.
- 宇都宮博 2005 女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知－子どもの目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント－ 教育心理学研究, 53, 209-219.
- 渡部玲二郎・佐久間達也 1998 児童の算数不安の構造及びそれに対する教師のサポートについて－ソーシャル・サポートの観点からの検討－ 教育心理学研究, 46, 184-192.
- 渡辺恵子・柏木恵子 1976 母親の教授スタイルと教育観－母親の子どもに対する行動と態度の一貫性の検討－ 教育心理学研究, 24, 45-56.
- 渡辺弥生 1989 児童期における公正観の発達と権威概念の発達との関係について 教育心理学研究, 37, 163-171.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親の共感との関係 教育心理学研究, 34, 324-331.
- 山口正二 1994 教師の自己開示性と心理的距離に関する研究 カウンセリング研究, 27, 126-131.
- 山口正二・土屋泰生・藤本尚文 1996 生徒と教師の心理的距離の改善に望ましいと判断される行動・態度に関する研究 カウンセリング研究, 29, 169-179.
- 山口正二・米田光利・原野広太郎 1993 教師の指導態度と心理的距離に関する研究 カウンセリング研究, 26, 107-112.
- 山本淳子・仲田洋子・小林正幸 2000 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連－学校不適応予防の視点から－ カウンセリング研究, 33, 235-248.
- 山本吉廣 1977 親子関係の類型と子どもの人格特性－親子関係診断尺度 EICA と YG 性格検査－ 関西

- 大学大学院人間科学, 9, 51-68.
- 吉田寿夫・坪田雄二・村中明彦・浜名外喜男 1996 児童の回答に対する教師のフィードバックにおける処遇差 社会心理学研究, 12, 64-74.
- 吉田道雄・山下一郎 1987 児童・生徒の学習意欲に影響を及ぼす要因と現職教師の認知 教育心理学研究, 35, 309-317.
- 吉崎静夫 1978a 教師のリーダーシップと学級の集団勢力構造に関する研究 心理学研究, 49, 22-29.
- 吉崎静夫 1978b 学級における教師のリーダーシップ行動の自己評定と児童評定の関連に関する研究 教育心理学研究, 26, 32-40.
- (2005年9月30日 受稿)

ABSTRACT

An Overview of Psychological Research on Parent-child Relationships and Teacher-pupil Relationships: Parents' and Teachers' Authoritative Attitudes

Takashi TOHYAMA

The purpose of this paper is to review the studies on parent-child relationships and teacher-pupil relationships. In section 1, the studies on influence of family, school, and classroom environment on children are reviewed. In section 2, the studies on influence of parents and teachers on children are reviewed from the following points of view. (1) The similarity between parents and child, between teacher and pupil. (2) The effects of expectation and educational policy parent and teacher have. (3) The influence of parent-child, teacher-pupil relationships and attitudes of parents and teachers toward children. In section 3, the framework of parent-child, teacher-pupil relationships, attitudes of parents and teachers toward children are reviewed. In section 4, the orientation studies on parents' and teachers' authoritative attitudes on children are suggested.

Key words: influence of parents and teachers, parent-child relationships, teacher-pupil relationships, authoritative attitudes